

本発表では、『純粋理性批判』における知性と感性の関係についての Stephen Engstrom の解釈を紹介し、ありうる反論に対して擁護することを試みる。

まず第1に、Engstrom の解釈の概要を説明したうえで、それをよく知られている類似の解釈、とくに James Conant および Alexandra Newton のそれと比較する。

次に、知性と感性の関係についての近年の論争として、John McDowell の『心と世界』からはじまる直観の概念説・非概念説解釈の論争を取り上げる。そして、McDowell の概念説の問題点を Engstrom が正しく指摘しているにもかかわらず、それ以降の論争はその指摘を無視しており、総じて間違った方向に進んでいるということを論じる。

最後に、『純粋理性批判』の解釈において重要な関心事となるであろう、カテゴリーの形而上学的／超越論的演繹に着目する。というのは、直観が知性に依存するという解釈に対しては、そうだとすればカテゴリーの超越論的演繹の意味がないという反論がなされることがあり、こうした反論は Engstrom にも向けられうるからである。ここでは、Markus Kohl の解釈を参考に、カテゴリーの起源がアプリアリであることが示されるならばその客観性も示されるという考えを検討することを通じて、Engstrom の解釈を擁護する。

\* \* \*

現代的な観点からみたととき、カントの『純粋理性批判』に認められる特徴のひとつは、超越論的論理学としての論理学の存在だろう。

カントのいう「一般的論理学」は、思考の間の単なる関係だけを扱う。この論理学において語られることの形式は、「あれが正しいなら、これも正しい」あるいは、「ああであるということは、こうであるということを含む」というものになる。Charles Travis の言葉を借りれば、論理学は「真理の伝播の学」(Travis 2021: 19)だということになるだろう。

これに対して、超越論的論理学は、論理学である以上(そして「超越論的」である以上)トピックを限定しない普遍性を持つが、認識のあらゆる内容を捨象するわけではない。つまり、超越論的論理学が扱うのは、内容を完全に捨象された思考の単なる関係ではなく、認識であるかぎりのあらゆる認識にそなわる普遍的内容である。「真理の伝播の学」である一般論理学に対して、超越論的論理学を「真理の論理学」と呼ぶことができる。

真理の論理学としての超越論的論理学があるという考えが重要なのは、それによって、我々が自分自身を合理的な存在として、つまり判断の合理的な形成者として反省することができるようになるからである。

仮に、一般的論理学の形式を「p ならば q」と表現するとしよう。超越論的論理学を、すなわち真理ないし p それ自体の意味を認めないならば、この形式は、「q あるいは not-p」と同じであり、q を受け入れるかわりに p を放棄することもできるということの意味するにすぎない。つまり、この形式を「p であるから q」という仕方で使用することはできない。

それゆえ、論理学が真理の伝播の学にすぎないとすれば、我々は判断の合理性を反省することができないだけでなく、ある判断から別の判断への移行の合理性も反省することができないことになる。総じて、我々は自分の判断の合理的形成者として自分自身を反省することはできない。実際、Travis は論理学の射程が理性の射程よりも短いと言い切っている(Travis 2007: 245)。

だが、もし我々の理性がアプリアリに反省を拒むものであるなら、はたして我々は自分自身を合理的な存在として理解することができるだろうか。このこと自体を論じることは、本発表の目的ではない。とにかく、超越論的論理学の存在によって、カントはそうした考えに反対しているということだけは明らかである。

ところで、超越論的論理学が真理の論理学であって、真理ないし虚偽の論理学、あるいは単なる有意味性の論理学でないとするならば、その論理学によって記述される認識能力すなわち知性は、単なる思考や空想の能力であるわけではなく、判断ないし認識の能力、すなわち、真理の能力であることになる。実際カントは、いわゆる『イェッフェ論理学』において、知性がそれ自身の法則に従って働く場合に結果するのは真理であると述べ(JL 9:53)、また『純粋理性批判』でも、誤謬は感官が知性に気付かれないうちに影響を及ぼすことによつてのみ生じると述べている(KrV: A294n/B351n)。

ここからわかるのは、認識のために知性と感性が必要だとカントが言う場合でも、両者の関係は著しく非対称的だということである。知性はそれ自身のうちに法則を持っており、しかもその法則に従うことによって知性は真理を結果する。それゆえ、知性が真理を結果するために感性が必要だとしても、それは知性の実現の条件としてであるにすぎない。

知性と感性の関係について、このような観点から論じている存命の哲学者として、本発表は Stephen Engstrom に着目する。その重要性にもかかわらず、Engstrom の解釈はあまり理解されていない、あるいは不当にも無視されているように見えるからである。

Travis, Charles. 2007. „Reason’s Reach“. *European Journal of Philosophy* 15 (2): 225-48.

Travis, Charles. 2021. „Force and Content“. In *Force, Content and the Unity of the Proposition*, herausgegeben von Gabriele M. Mras und Michael Schmitz, 1. Aufl., 17-39. New York: Routledge.

Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Hamburg: Meiner. [=KrV]

[Kant, Immanuel]. 2001. 「論理学」. In 『論理学・教育学』(カント全集 17). 岩波書店. [=JL. なおページ数は Akademieausgabe のものに準拠する]